対馬新聞 第2706号
(2) 平成元年4月6日（木曜日）

社説

日韓トンネルは今

大アジアのハイウエイ実現に向け、対馬を中継して日本と大陸を結ぶ国際ハイウエイプロジェクト構想が提唱されて八年目を迎える。

九州本土から韓国まで海底トンネルで結び、アジア大陸縦断を目指す夢の大構想である。昨年開通の青函トンネルや瀬戸大橋、英仏両国間のドーバー海峡海底トンネル着工に刺激され、熱を帯びてきたようである。

すでに可成りの経費を投じて、唐津地区で調査斜坑二百十㍍の掘削工事をはじめ、地質、海洋、気象、地震、音波、その他の調査が着々と実施され、その経過や結果が次々に発表されている。海底トンネルでありながら壱岐と対馬は陸上駅の構想がある。

昨年の理事会で、この海底トンネル工事は二十一年間で完成させる活動方針が発表された。既に韓国側でも推進組織ができ、日韓トンネル建設事業団対馬事務所から韓国側のボーリング検層の応援に行っている。

対馬事務所では各種調査の結果をふまえ、調査坑工事に備えて建設用地の確保・搬入道路の整備、工事用水の確保、調査坑の設計、工事費、工期、施行法などの明確化を重点課題に努力すると張り切っている。

以前、このような莫大なプロジェクト構想が打ち出された時、各マスコミは大々的に報じた。その後、どこまでこの計画が進展しているかは、対馬島民のほとんどが知らないでいる。それに関わっている職員が地元の人たちとどれだけ多くふれあっているだろうか。

今の民間主導型から国の施策事業として取り上げては、の意見があるが、簡単には話がつかないだろう。

いつの時代に実現されるのか、夢物語で終わるのかはさておき、末永く見守っていきたい。ただ島民の関心と理解を求めるためにもPR不足ではないか。